

pon

kanpi-sos

# ポン カンピソシ



# 2

アイヌ文化紹介小冊子

仁

着る



## 本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しております。昨年度の第1冊目では「イタク話す」と題してアイヌ語について紹介しました。

この第2冊目では、衣服をとりあげました。伝統的な衣服のあらましや衣服の素材、製法などを写真を交えて説明するとともに、装飾品や独特の文様、衣服を鑑賞したり衣服について学んだりできる施設などについて紹介しています。

この小冊子が、アイヌ文化についての理解を深めるきっかけになれば幸いです。

ボン カンピ ソシ  
pon kanpi - sos 小冊子  
小さい 紙 束

イミ  
imi 着物を着る

## 目次

[ 1 ] アイヌの衣服のあらまし	2
1 アイヌの衣服の歴史	2
2 アイヌの衣服のあらまし	6
[ 2 ] 衣服の仕立て方と装身具	22
1 衣服の仕立て方とたたみ方	22
2 文様を施す	25
3 装身具など	26
[ 3 ] 衣服について学ぶために	28

# [ 1 ] アイヌの衣服のあらし

## 1 アイヌの衣服の歴史

アイヌ民族がかつて着ていた衣服について、どれぐらい昔までさかのぼって調べることができるでしょうか。

今のところわかっているのは、400年くらい昔の文献の記録です。それより古い時期については、文様の起源などに関していろいろな説が唱えられていますが、形が似ているなどのこと以上に十分な根拠を示しているものはまだ見られません。実際に残っている衣服は、ほぼ19世紀以後のものになります。

周囲の他の民族と同様に、アイヌの衣生活も19世紀後半から20世紀にかけて大きく変化し、しだいに和服、洋服を着ることが増えました。様々な伝統的な儀式のときなどには独特の晴れ着で正装しましたが、それも、同化主義のもとでアイヌの伝統文化が否定される風潮が強まり、着る人も着る機会もしだいに減少しました。

そうした中でも、親しい人だけの集まりでは晴れ着を着たり、プレゼントやお土産として製作したり、先祖たちから伝えられた着物を大切に家に残しておいたり、といったことはあちこちで行われてきました。

### General Introduction to Ainu's Clothing

How far back can we trace the study of clothing which the Ainu peoples used to wear? The extent of reliable records found in the literature is limited to the documents written some 400 years ago. As for the styles of clothing earlier than this period, many assumptions have been raised in regards to the origin of the design patterns which are yet to be fully proven except for the similarities of the design. Clothes which remain today were made only after the 19 century.

As is the case in other ethnic groups in surrounding areas, drastic changes were introduced to their clothing styles from the late 19th to the 20th centuries and consequently Japanese and western clothing have gradually become a major part of their daily wear. Although their unique ceremonial clothes were worn at traditional rituals of various sorts, the number of people and occasions to wear them have decreased under the growing assimilation, and at times a denial of tradition.

現在のアイヌの衣生活の中心になっているのは洋服や和服などです。ふだんの生活の中で民族独特の衣服を着ることはありません。一方、近年様々な分野でアイヌの伝統文化の見直しや復興が進むなか、儀式に参加するときや、歌や踊りを披露するときなどに晴れ着を着たり、そのための衣服を作ったりすることが増えてきました。伝統的な衣服の作り方をあらためて調べ学んだり、そのデザインを現代の衣服や装飾品などに活かすことも試みられるようになりました。衣服の作り方や刺しゅうの講習会、製作品のコンクール、展覧会なども行われています。



写真1 北海道アイヌ伝統工芸展

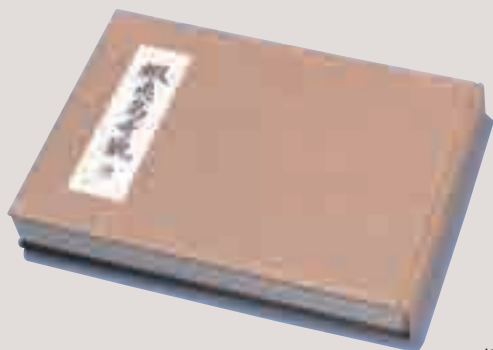
Despite the changes surrounding their culture, they continued to wear their own ceremonial clothes at gatherings among families and friends, making traditional clothes as a gift or a souvenir. Traditional clothing was given from forefathers as a family treasure.

Today, western and Japanese clothes are dominant in Ainu peoples' daily life. However, in line with the growing recognition and restoration movement of Ainu's traditional culture in various aspects in recent years, they increasingly wear their own ceremonial clothes at rituals and artistic performances of song and dance which creates a growing demand for a greater production of their traditional clothes. As part of this effort for restoration of their traditional clothes, traditional dress-making methods are studied more systematically, while application of the traditional designs in contemporary clothing and ornaments is sought after. Workshops for traditional Ainu dress-making and embroidery are offered as well as various competitions and exhibitions of their handicrafts.

## アイヌの衣服についての昔の記録

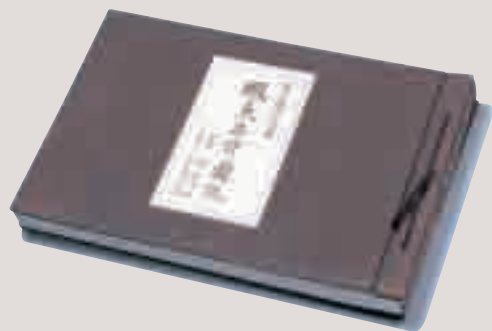
アイヌの衣服に関する最初の記録は、イタリアの宣教師アンジェリスによるものとされています。1621年に松前に行ったときの報告の中で、そこで見たアイヌの人たちの様子を書いています。オランダ人フリースは、1643年に北海道の東海岸から国後島、サハリン(樺太)へと航海をした記録の中で、それぞれの地域で見たアイヌの人たちの様子を書いています。新井白石の『蝦夷志』(1720年)や、シャクシャインの戦い(17世紀後半)に関する津軽藩の記録を含んでいる『津軽一統志』(1731年)などにも、当時のアイヌの衣服の様子が書かれています。

1800年代に描かれた秦檜磨『はたあわびまる 蝦夷島奇観』、『えぞしまきかん 蝦夷生計図説』などは、当時の衣服やその作り方、着るときのきまりなどに関する詳しい記録や図画を残しています。



蝦夷島奇観

これらの記録は、現物が残っていないものや今日では知られていない技術を知ることのできる重要な資料でもあります。他方で、こうした記録には、自分で観察しないで伝聞によって書いたものや、観察する側の思い込みで書いたものなどがあり、そのまま鵜呑みにはできないことがあります。例えば江戸時代の日本で描かれた絵画ではアイヌの人たちがみな左前で服を着ているようになっているものがあります。左前というのは昔の中国で野蛮な風俗とされたものです。実際には左右のどちらを前にすることもあれば、体の前で合わせる衣服もあったのですが、アイヌ民族の風俗を「野蛮」なものだとする偏見がもとになって、こうした描かれ方になってしまったものです。



蝦夷生計図説

---

## 2 アイヌの衣服のあらまし

### アイヌ衣服のあらまし

アイヌの衣服には、素材や文様の付け方などによって様々な種類があり、地域ごとにも特徴があります。

同じような衣服でも、地域によってアイヌ語の呼び方が違うことがあります。文献や各地の博物館の展示の説明でも、ある地域のアイヌ語の呼び方を用いていたたり、  
「もめんじくろきれおきもんい木綿地黒裂置文衣(木綿地に黒い布をアップリケのように縫いつけ文様にした衣服)」  
のように見た目の様子を日本語で表現していたり、いろいろな場合があります。

性別、年齢などによって着てよいとされる衣服の区別や、労働など日常の暮らしで着るもの(日常着)と、儀式など公の場で着るもの(晴れ着)との区別もあります。

例えばアットウシという呼び名がアイヌの衣服全体の呼び名や代表的な名前のように使われることがありますが、これはオヒョウ(ときにはシナノキモ)の樹木の内皮の繊維をもとに作った布やそれを素材にした衣服の呼び名です。

そのほかにも、特に古い本や写真などでは、日常生活の写真で晴れ着ばかりを紹介していたり、地域や時代をごちゃごちゃにしていたりすることもあるので注意が必要です。

ふつう、アイヌの衣服の種類は素材によって大きく分類されています。この冊子でも、おおむねそれに従って分類し説明してみました。

Ainu's clothing is characteristic of the region of origin and classified by the materials as well as the design patterns.

Clothing is also categorized according to the age and gender of the intended wearer and by the purpose. Clothes are worn for either daily routine or in the case of rituals.

Early publications have displayed photographs of Ainu's ceremonial clothing which were taken not necessarily at the rituals, and there has been a lack of photos showing Ainu in every day clothing. There have been some oversights as to the region from which the clothing came from and mistakes in chronological dates.



---

## 動物の皮を素材にしたもの

けものの皮を使ったもの（獣皮衣）

クマ、シカ、キツネなどの陸上動物や、アザラシ、ラッコ、オットセイなどの海獣の皮を使ったものです。



写真2 クマの皮を使った獣皮衣（『蝦夷生計図説』）

### Hide and Fur

Various hides and furs of both the terrestrial animals including that of bear, deer and fox and the sea mammals such as seal, sea otter and fur seal are used for the making of clothes.

---

魚の皮を使ったもの（魚皮衣）

サケ、マスなどの魚の皮をはぎ合わせて作るものです。主としてサハリン(樺太)で着ていたようです。他の衣服と比べ袖が細めで、裾が広がった、洋服のワンピースのような形をしています。



写真3 魚皮衣（サハリン・子供用）

Fish Skin

Skin of salmon and trout are patched together which were mostly worn by the ainu in Sakhalin.

---

鳥の羽毛を使ったもの（鳥羽衣）

ワシ、タカ、エトピリカ、アホウドリなどの羽毛つきの皮を縫い合わせて作ったものです。



写真4 鳥羽衣（千島）

#### Bird Feathers

Skins with feathers of birds such as eagle, hawk, tufted puffin and albatross are sewn together.

---

## 植物の繊維を素材にしたもの

### 樹皮を使ったもの（樹皮衣）

オヒョウ、シナノキなどの内皮から繊維をとって反物に織ったものを素材にします。  
素材の中ではオヒョウが柔らかくてよいとされます。

22～23ページに、製作の工程を説明してあります。



オヒョウの葉



オヒョウの木肌

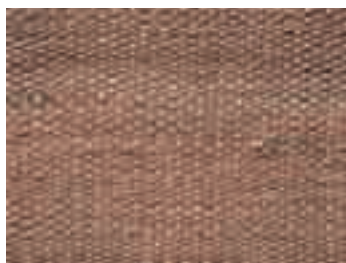
### Plant Fibers

Fibers from the inner bark of a kind of elm and Japanese linden are woven into textile fabrics for dress-making of which the production process is shown on pages 22 and 23.



写真5 樹皮衣（サハリン）

オヒョウの布の拡大図



シナノキの布の拡大図



---

草を使ったもの（草皮衣）

イラクサなどの内皮の繊維で織った反物を素材にしたものです。主にサハリンに見られます。オヒョウなどの場合と比べると、糸が細く色が白めです。



イラクサ

Grass

Fibers of a nettle are woven into textile fabrics, a practice mainly found in Sakhalin.



写真6 草皮衣（サハリン：イラクサに木綿を混ぜて織ってあります）



イラクサの布の拡大

---

## 木綿を素材にしたもの(木綿衣)

交易などで手に入れた木綿の古着、古裂<sup>ふるぎれ</sup>、反物などを材料にしたものです。各地に見られ、アイヌ語の呼び名もさまざまです\*。文献などでは、見た目の様子と木綿布の使い方によって、絹や小袖などの古裂でこまかく切り伏せを施したもの(写真7、8がこのタイプです)、黒や紺の布で切り伏せを施したもの(写真9がこのタイプです)、大きめの白い布で模様を施したもの(写真10や24ページのイラストはこのタイプです)、切り伏せを用いずに、刺しゅうを施したりしたもの(写真11がこのタイプです)、というふうに大別されることが多いようです。もっとも、どの地域でもこの4つのタイプがあったというわけではありません。

木綿衣は、木綿が入手しやすくなってから多く作られるようになったと言われており、例えば上記のタイプのものは、大きな幅の白布が入手しやすくなった、明治の終り頃から大正時代にかけて作り始めたものです。

### Cotton

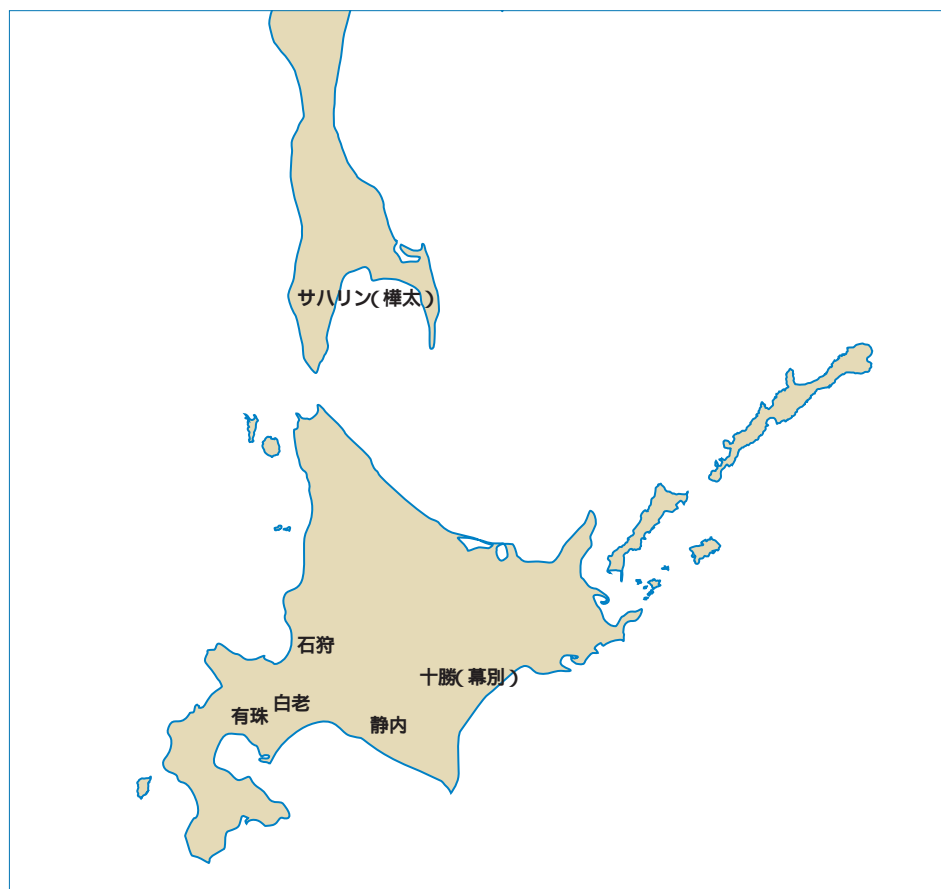
Old cotton clothing and remnants of precious clothing were introduced through early trade practices which were prevalent in many areas and called by different names in the Ainu language.

\*例えば、木綿地に大きめの白布を切り抜いて縫いつけ文様を施した着物は、日高の静内町では「チカラカラベ」と呼ばれていますが、同じ日高でも平取町では「カパラミナ」と呼ばれていますし、木綿地に黒や紺の木綿布を付けて直線模様にし、その上に刺しゅうを施した着物を静内町では「チニンニヌヅ」(ときに「サクリ」「イヨサクリ」と呼びますが、平取町ではこのタイプの木綿衣をおもに「チカラカラベ」と呼びます。



---

サハリン(樺太)と北海道のいくつかの地域を例に、それぞれの地域の昔の木綿衣を紹介します。



伊達市(有珠)



写真7

白老町



写真8

石狩



写真9 (志村弥十郎さん。1872年頃の写真です)

静内町(農屋)



写真10

---

十勝(幕別町蝦夷文化考古館所蔵)



写真11

サハリン(1876年に石狩に移住した人たちが作ったものです)



写真12

---

## 外来のもの

衣服そのものが他の地域から入ってきて、それをほぼそのまま着ているものには、次のものがあります。いずれも貴重な衣服として扱われ、正装のときにアットウシなどの上に着ました。

中国東北部から入ったもの

日本語で山丹服<sup>えぞにしき</sup>とか蝦夷錦と呼ばれるものです。中国の清の役人の服が、現在の中国東北部、沿海州地方からサハリンとの交易を通じて北海道に入ってきたものです。



写真13 山丹服

Clothes from North-Eastern China

Garments for the Court Officials of the Ching(Ch'ing) Dynasty were brought to Hokkaido from what is known today as North-Eastern China and Primorskii Krai through a trade route with Sakhalin.

本州方面から入ったもの

- ・ 打ち掛け、小袖、能衣装など：絹に刺しゅうを施した華やかなもので、そのまま着たり、裏をはがして表だけを着たりしました。
- ・ 陣羽織：武将が使っていた陣羽織です。主<sup>おも</sup>だった男性が着ました。



写真14 陣羽織

Clothes from Honshu

- ・ Garments: Ceremonial overgarment, Wadded silk garment, Garment for Noh-drama performance
- ・ A coat worn over the armor by a warlord

## その他

下着・日常着

これまで紹介してきた衣服の多くは晴れ着として用いられたものです。昔の日常着は、文様などがあまり見られないことが晴れ着との違いです。獣皮、樹皮、草皮、木綿などで作りました。

女性はかつては家の中では、多くの地域でモウルと呼ばれている、写真のような服を着ていました。そして来客があつたり、外に出たりするときに、その上からこれま

---

で紹介してきたような服を着たといいます。頭からすっぽりとかぶるかたちのもので、昔は獣皮で作っていましたが、のちには、木綿で作ったり、和服の襦袢から作ったりしたものもあります。

男性の昔の下着については、樹皮や木綿で作った下帯をしていたことなどがわかっています。



写真15 木綿のモウル

## Others

### Underwear and Routine Clothing

Day to day clothing characteristically has much less decorative patterns than the ceremonial clothes and garments so far introduced in the previous pages.

Women, at home, wore such clothes as shown in the photo which was called "mour" in many areas and would put more decorative and precious clothing over their routine clothing when they had guests or went out in public places.

# [ 2 ] 衣服の仕立て方と装身具

## 1 衣服の仕立て方とたたみ方

オヒョウの樹皮からアットウシができあがるまでの手順です。

木の幹の根元近くに切り目を入れて皮をはぎます（季節は梅雨明けごろが水分が多くてよいとされます）

内皮と外皮にわけて、内皮を10日ほど沼などで水に漬けてふやかします（地域によっては温泉に漬けます）

ふやけたら水で洗って不純物を流し、それから繊維層をはがします

細く裂いて、端を結び合わせて長い糸にします

織り機に糸をかけ、布を織ります

出来上がった布から、次のページのイラストのように服を仕立てます



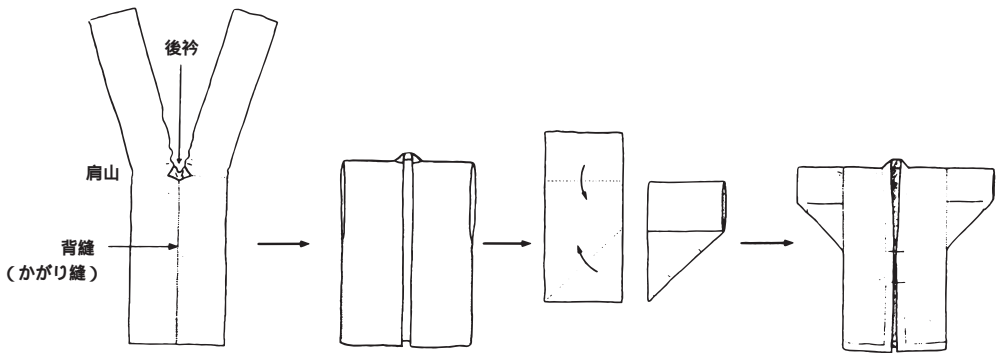
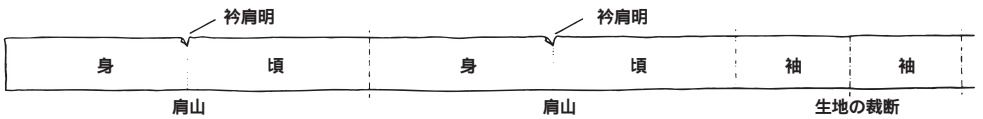
写真16

Dress-making and Storage  
Procedures of "attus" making from bark of a kind of elm.





生地<sup>①</sup>の仕立て方



衿<sup>②</sup>明<sup>③</sup>けに後衿<sup>④</sup> (別布<sup>⑤</sup>か端裂<sup>⑥</sup>) を付ける

脇縫

もじり縫

(児玉マリ『衣服の種々相』、『ひとものこころ』天理教道友社より)

では次に、衣服のたたみ方です。これは、衣服の種類はもちろん、地域ごとにも、それぞれの人によっても違っていたようですが、一例として、静内町の織田ステノさん(1902~1992年)の木綿衣のたたみ方を紹介します。

### 衣服のたたみ方



\* 背中部分で袖を合わせます



\* 片方の袖から手を通して両方の袖口をつかみます (ここまでは、着たままの状態から、脱ぎながらすることもあつそうです)



\* つかんだ袖口を引きます。これで裏返し状態が半になります



\* 袖をたたんでから、2つ折や4つ折にするか、または丸めます



Procedures of folding of clothing for storage

## 2 文様を施す

衣服などに施した独特の文様は、布を切って衣服につけたり、刺しゅうをしたりして作ります。こうして作られる文様にも、地域ごとに特徴があります。

刺しゅうの文様には魔除けの意味があると言われますが、実際のところは地域や人によって様々です。昔のことをよく知っているお年寄りの話でも、文様の<sup>とげ</sup>部分に魔除けの意味があるという人もいますし、文様には特にそのような意味はないという人もいます。



### Pattern-Making

Patterns on the clothes which are characteristic of the area of origin are made by patchwork and embroideries.

### 3 装身具など Ornaments

#### 頭にかぶるもの（笠、帽子、頭巾）

A Bark hat for summer, a hood and a hat for winter

笠はサハリンで用いられていました。主に夏のかぶりもので、樺の皮で作ったもの、ヤナギやミズキの削りかけを編んで作ったものがあります。帽子、頭巾は主に冬のかぶりものです。樹皮で作ったものと木綿や麻などで作ったものがあります。冬の山猟のときにかぶりました。



写真17 帽子(北海道)

#### はちまき Head band

あらたまって人前に出るときや儀式のときなどにはちまきを着用することがありました。多くは木綿しゅすや綿子しゅすなどを使います。刺しゅうを施すものもあれば、無地のものもあります。より日常的な場では日本手ぬぐいをういたりもします。形は、額にあたる部分が幅広くなっているものと、全体の幅が同じものがあります。



写真18 はちまき

#### 耳飾り Earrings

耳たぶに穴をあけて、そこに真鍮しんちゆうや銀など金属製の環を通して下げるものです。昔は男性も付けていました。大きさは直径2、3センチのものから10センチ以上に及ぶものもあり、飾り玉のついているもの、針金状のもの一方を渦巻きにしているもの、などがあります。



写真19 耳飾り

### 首飾り Necklace

女性が正装のときに下げるものです。ガラスの玉を紐に通したもので、玉と玉の間に古銭を通したり、中心に飾り板を付けたりしたのものもあります。



写真20 首飾り  
(左：門別町、右：新冠町)

### 帯 Belting

あらたまった席など、時と場合によって男女とも帯をしめます。帯は、和服に比べると細い幅のものです。長さは胴をふた廻りして結ぶくらいのものです。



写真21 帯

### 手甲・脚絆

Covers for the back of hands and Leggings

山歩きや農作業のときに用いました。

手甲は手の甲にはめて巻つけるものと、手袋の指先のない形のものがあります。脚絆には、足に巻き付けるものと、筒状になっていて足を入れるものがあります。



写真22 手甲



写真23 脚絆

# [ 3 ] 衣服について学ぶために

## 博物館など

アイヌの衣服を展示している施設は道内に数多くあります。道外でも、アイヌの衣服を所蔵し展示している施設があります。

ここでは、国内の博物館などで、アイヌの衣服について常設の展示があり学芸員や専門の研究者がいる施設、または貴重な資料を展示している施設の中からいくつかを紹介します。

### 道内

旭川市博物館	(旭川市神楽	0166-69-2004)
弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館(弟子屈町屈斜路	01548-4-2128)	
帯広百年記念館	(帯広市緑ヶ丘	0155-24-5352)
北海道開拓記念館	(札幌市厚別区	011-898-0456)
北海道立アイヌ総合センター	(札幌市中央区	かでの2・7ビル 011-221-0462)
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園(札幌市中央区	011-251-8010)	
苫小牧市博物館	(苫小牧市末広町	0144-35-2550)
新ひだか町アイヌ民俗資料館	(新ひだか町静内真歌	0146-43-3094)
萱野茂二風谷アイヌ文化資料館	(平取町二風谷	01457-2-3215)
平取町立二風谷アイヌ文化博物館(平取町二風谷	01457-2-2892)	
アイヌ民族博物館	(白老町若草町	0144-82-3914)
函館市北方民族資料館	(函館市末広町	0138-22-4128)

### 道外

東北歴史資料館	(宮城県多賀城市浮島	022-368-0101)
東京国立博物館	(東京都台東区上野公園	03-3822-1111)
国立民族学博物館	(大阪府吹田市千里万博公園	06-6876-2151)
天理大学附属天理参考館	(奈良県天理市守目堂町	0743-63-1515 内線6702)

アイヌの衣服に関する学習のための図書や視聴覚資料、博物館等の施設については、『アイヌ文化紹介小冊子10 総集編』(2005年)でも紹介しているほか、当研究センターのホームページ上に、その後の追加・更新情報を掲載しています。

## 日本国外の資料について

海外の資料は、そのほとんどが欧米諸国の博物館などにあります。衣服を含めたアイヌ関係資料の点数は、確認されているだけでも、ロシアとヨーロッパ諸国に約11,500点、北米には約3,100点にのぼります。これらの資料の多くは、かつてそれらの国々の研究者らが調査し収集したもので、日本国内のものとは比べると、クリル（千島）列島やサハリン（樺太）のものを多く含んでいたり、収集した地域や時期が比較的はっきりしていることが特徴です。こうした海外の資料の中の衣服については、本格的な調査はまだ始まったばかりです。

ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（塔のある建物）



Ainu's clothing are exhibited at many museums in Hokkaido and in some institutions in other areas of Japan.

Most materials overseas are housed in museums and a confirmed number of items relevant to the Ainu including clothing amounts to 11,500 items in Russia and Europe and 31,000 items in North America.

## 展示会など

近年は衣服の製作を続ける人たちや個展や教室の作品展なども開かれるようになってきています。また、北海道ウタリ協会（現 北海道アイヌ協会）では毎年、2月頃に「北海道アイヌ伝統工芸展」を開いているほか、夏に千歳空港で工芸品の紹介を含めた歴史と文化についての展示を行っています。



北海道アイヌ伝統工芸展

## 学習・体験できる施設、講習会

衣服の作り方や刺しゅうの仕方などを学ぶことのできる講習会は、近年各地で開かれるようになりました。一般の希望者を対象に毎年定期的に講習会を行っている施設や団体のいくつかを紹介します。

北海道立アイヌ総合センター（札幌市 011-221-0462）

ヤイユーカーラの森（札幌市 011-592-1748）

アイヌ民族博物館（白老町 0144-82-3914）

この他にも、道内各地や首都圏などで、博物館や伝承活動を行っている団体による講習会が開かれています。講習会の内容や開講時期などについては、各年度ごとに予定が組まれますので、それぞれの機関にご照会ください。



## 文献など

アイヌの衣服について学ぶことのできる文献を紹介しておきます。概説書のほか、博物館の図録など図版や写真を豊富に収めたものやビデオなども集めてみました。現在も書店などで市販されているものには価格を記しました。その他にも、発行所から購入することのできるものがあります。

### 概説書・研究書

アイヌ民族博物館(監修)『アイヌ文化の基礎知識』草風館 1993年 1,600円

萱野茂『アイヌの民具』すずさわ書店 1978年 10,000円

著者の生まれ育った平取町二風谷を中心に主に沙流川筋で使われていた民具を写真と文章で説明しています。

児玉マリ「アイヌ民族の衣服と装飾品」『北海道の研究 7』清文堂 1985年

アイヌの衣服と装飾品についての比較的まとまった概説です。

佐々木利和『日本の美術 第354号 アイヌの工芸』至文堂 1995年

衣服を含むアイヌの工芸について、一部カラー写真も用いて解説しています。

北海道教育委員会(編)『アイヌ衣服調査報告書』1~4 北海道教育委員会 1986~1989年

北海道教育委員会による調査の報告書です。1は北海道、2~4はサハリン(樺太)についての資料を掲載しています。

### 図録・目録

静内町・北海道ウタリ協会静内支部(編)『静内地方のアイヌ衣服』静内町・北海道ウタリ協会静内支部 1993年

アイヌ民族博物館(編)『アイヌの衣服文化 着物の地方的特徴について』アイヌ民族博物館 1991年

各地のアイヌの衣服を集めて催された展示の図録です。

東京国立博物館(編)『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料篇』東京国立博物館 1992年

東京国立博物館(編)『アイヌの工芸』東京国立博物館 1993年

1993年に同館で開催された展示の図録です。同館の資料のほかドイツ国内の資料も展示されました。

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館(編)『アイヌ文化展図録』東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 1990年

小川早苗・かとうまちこ『アイヌ紋様を曾祖母から継いで五代』アイヌ文化伝承の会手づくりウタラ 1996年 2,500円

天理大学・天理教道友社(編)『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館 アイヌのきもの』天理教道友社 1991年 12,000円

天理参考館が所蔵するアイヌの衣服について、写真、図版のほか解説文を載せています。大型の本なので写真も大きく見やすくなっています。

## ビデオ

『アイヌ文化を学ぶ』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 3,700円

衣服のほか口頭文芸、食べもの、住まい、信仰などアイヌ文化の概要に関する入門的な内容のビデオです。簡潔な解説書が付いています。

『アイヌ文化伝承記録ビデオ大全集』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会

1976(昭和51)年から毎年度1巻ずつ製作され、5巻ごとにまとめて発売されています。

この中の「静内川 アイヌのくらし」「フチとエカシをたずねて 薬事・狩猟・刺繍」「同彫る・織る・語る」などで衣服に関する伝承技術を扱っています。

財団法人アイヌ無形文化伝承保存会は2007(平成19)年度末をもって解散しました。同会が製作した視聴覚資料についての問い合わせの窓口は、社団法人北海道アイヌ協会(011-221-0462)となっています。

## その他本書を書くにあたって参考にさせていただいた文献

児玉作左衛門「江戸時代初期のアイヌ服飾の研究」『北方文化研究報告』20輯 1965年12月

犬飼哲夫「千島アイヌの鳥皮衣」『北方文化研究報告』18輯 1963年4月

北海道教育委員会(編)『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 1968年

## 協力(敬称略)

社団法人北海道アイヌ協会 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

東京国立博物館 財団法人アイヌ民族博物館 津田命子

## 写真提供、出典等

写真1: 社団法人北海道アイヌ協会

写真2, 16: 『蝦夷生計図説』復刻版(河野本道, 谷澤尚一解説)北海道出版企画センター

写真3: 東京国立博物館

写真4, 5, 6, 15, 17, 18, 19, 20, 21, 23: 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

写真8, 10, 11, 12, 19, 22: 財団法人アイヌ民族博物館

(11は幕別町蝦夷文化考古館所蔵, 12は上野千春氏所蔵)

写真9: 佐々木利和『日本の工芸 354 アイヌの工芸』(東京国立博物館所蔵)

写真13: 児玉マリ氏

上記以外の写真は当センター所蔵写真(7, 14はハンガリー国立民族学博物館所蔵パラートシ・コレクション)

この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。

古紙配合率100%

発行 平成9年3月（2刷 平成15年3月）  
（3刷 平成19年3月）  
（4刷 平成22年3月）

編集 北海道立アイヌ民族文化研究センター  
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 ひぐさみ 緑苑ビル 1階  
TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://ainu-center.pref.hokkaido.jp/>



オヒョウの木